

## 力を神に帰せよ

戦争の悲惨さで心が潰れそうな日々。詩編 68:20 から「わたしたち」という信仰共同体の賛美が始まる。25 節からは音楽隊の演奏に伴われて、神が聖所に向かって行進される様が歌われている。29 節～32 節では視線がイスラエルの民の将来に向けられ、かつてイスラエルを解放して下さった神が将来においても救いを与えて下さることを願い、信仰者の群れの過去と現在と未来が結びつけられている。33 節以下は、この詩の末尾となるが、この世の国々がイスラエルの神賛美に招かれていることを述べ、ヴィジョンが宇宙大に広がっている。「力を神に帰せよ。神の威光はイスラエルの上であり、神の威力は雲の彼方にある」。力を人間、その政治的、経済的、社会的力にではなく、神に帰せよ！黙想せよ、私たちとともに救い主である神が行進されるのを！何と嬉しき、晴れがましきよ！

### 1. 20 節～24 節

「バシヤンの山」が 16 節に登場したその文脈に戻り、「主」（神名ヤハウエ）ではなく「アドナイ＝主人」である神が語った。神は北方の敵に囲まれたバシヤンからイスラエルを連れ帰り、かつて、南西のエジプトからの奇跡的救済（紅海渡渉：海の深い底から）によって彼らを連れ帰られた。あなた＝イスラエルは敵から奪った「分け前」（12 節以下に繋がる）を分配せよと言われた。血生臭い表現ではあるが、あくまで「神の勝利」、イスラエルには奇跡的「救済」なのである。

### 2. 音楽隊に伴われる神の行進 25～28 節

神は、歌い手を先頭に、器楽を演奏する者たち、太鼓を叩く女性たちと共に（エルサレムの）聖所に向けて王として勝利の行進をされる。「聖歌隊」は神をたたえる。神は「わたしの」王であり、「わたしの」神である！

勇猛果敢な若きベミヤミンが行進を統率し、ユダ族の君侯らが指導者として続き、北方のゼブルン族、ナフタリ族の君侯らもいる。

### 3. イスラエルの民の将来 29 節～32 節

このように神礼拝において、過去の救済史が現在と関わり、その将来と結びつく。イスラエルを「あなた」と呼びかけながら、力を帯びる神が、イスラエルも力を持つことを命じ、あなたと呼びかけられたイスラエルは、今度は祈り手として「神よ、力を振るってください。わたしたちのために行動してください」と請願する。出エジプトの際、「葦の茂みに住む獣を踏みにじり」、「猛牛の一群」のようにイスラエルを襲った「諸国の民を」蹴散らしてください、彼らは闘いを好み、銀製品を略奪する人たちなのです、と訴え、逆に、エジプト、ナイルの上流のクシュが青銅などの貢ぎ物を持ってくるように、と願う。

### 4. 力を神に帰せよ 33 節 36 節

いと小さく弱く、へりくだらされた信仰共同体が地の諸国に呼びかける。高い天（天の諸天）を駆って進み、力強い御声を発する「主」（アドナイ）を「共に」賛美しよう。

イスラエルの民は地の諸国に呼びかける、「力」を神に帰せよ。神の照り輝きを再び神にお返ししよう！神の威光（素晴らしさ）はイスラエルの上、神の威力は雲の彼方にある。イスラエルの神は御自分の民に力と権威を賜る。「神をたたえよ」＝「神を祝福しよう、神を喜（嘉）ぼう」